社会イノベーション研究
第10巻第1号（1-22）
2015年1月

2014年10月10日掲載承認

「3.11以降」の惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“限界状況の想像／創造力”

――矢澤修次郎，A. メルッチ，J. ガルトゥング，古城利明の問題提起に即して

新　原　道　信

> もっともたやすきことは，実質のある堅固なものを［外側からいいとかわるいとか］裁く（beurteilen，批評／批判／判断する）ことである。難しいのは，それを把握する (fassen) ことだ。もっとも難しいのは，［この批評／批判／判断と把握という］二つの契機を結びあわせて，［自分ならどのようにできるのかを］表し出す (hervorbringen) ことだ。
>
> G. W. F. ヘーゲル『精神現象学』「序論 (Vorrede)」(Hegel 1986 [c1970]: 13)

1.　はじめに――〝引き受け／応答し，始める〟ために

本稿の眼目は，〈集合的知性，組織的知性はいかにして可能か〉という現代の知識人の問題，とりわけ社会学と社会運動の関係性の問題を追求してきた矢澤修次郎先生から発した学問の水脈の意味をふりかえることを通じて，〈「3.11以降」の惑星社会の諸問題を引き受け／応答する「新たな学 (scienza nuova)」〉を構想することにある。

考察は，主として2013年2月26日に成城大学グローカル研究所で行われた矢澤修次郎先生の報告「グローカル研究の可能性――社会学の立場から」をとりあげて行う。加えて，2006年3月に刊行された一橋大学の退官記念論集である『地球情報社会と社会運動』に収録されたインタビュー「身体化された社会学のために――大学と都市空間の知識化にむけて」（矢澤 2006: 375-420）[1)]

によって補足する。社会学という学問世界の構造のみならず，その「通奏低音」[2] を構成する現代社会のメカニズムとダイナミズムを理解しようとした矢澤先生ご自身の「通奏低音」も含めた理解を試みたい。

A. メルレル (Alberto Merler) と A. メルッチ (Alberto Melucci) を学問的な「盟友」として，イタリア・地中海・ラテン世界を主たるフィールドとする“社会学的探求 (Sociological Explorations)”をすすめてきた筆者は，今日にいたるまで，恩師・矢澤先生から多大な学問的な影響を受けてきた。C. W. ミルズ，A. グールドナー，P. ブルデュー，A. メルッチ等の“リフレクシヴな社会学”（「科学の社会学」「社会学の社会学」『“反射的反省性 (réflexivité réflexe)”の社会学」「聴くことの社会学」）の流れのなかにあった矢澤先生の学問を理解し語ろうとすることは，自らの学問の“在り方 (Ways of being)”へのトータルな問いかけとならざるを得ない。すなわち，すぐれた「智の先達」によって築き上げられたものを〈いかに“引き受け／応答する (responding for/to)”のか〉，その構築物の背後の心意／深意／真意をいかに把握し，〈どのように“［何かを］始める (beginning to)”（表し出す）のか〉という問いが含意されている。〈なにものかについて語る自分の語りがいかなる枠組みによって拘束されているのを知りながらあえて語る，語りながら自分の身体の中にある拘束，境界線の束を明らかにしていくこと〉を旨とする“リフレクシヴな社会学”を「身体化」[3] しているかが問われているのである。

本稿冒頭のヘーゲルの「表し出す (hervorbringen)」という言葉は，“作る／造る／創る”“始める”にあたるものだが，それは一見，到達点として登場する。しかしそれは，“［何かを］始める (beginning to)”[4] ことが到達点でもある（Prinzip＝原理・原則とは到達点であると同時に始めにある）ということが当人にもつかまれている状態で，その時点での限界も呑み込んだうえで企図するという行為であり，「問題解決」ではない。そこからさかのぼって，fassen，すなわちなにごとかを大きくつかむ（把握する）という“道行き・道程 (passaggio)”は，ゆったり，ゆっくりと，蛇行し，滞留・対流し，伏流水としてのたうちまわり，うねり，澱み，時として奔流となり濁流となる。つまり，自らにも“対位的 (contrapuntal, polyphonic, disphonic and displaced)”となり，異なる声を同時にあげ，どこにいても不協和音となり所在のない不均衡な存在として現れ続けることとなる。

それは，具体的な生身の人間が日々の現実の中で，働く (lavorare)，書き遺

す (scrivere)，練りあげる (elaborare)／創る (creare)／企図する (progettare)といった行為をいったり来たりする動きとして現象する。「誠者天之道也，誠之者人之道也（誠は天の道なり，これを誠にするは人の道なり）」『中庸』のごとく，「天の道」を認識する孤絶した「知識人」としてではなく，「みずから労働する知識人」[5] として，「これを誠にする」プロセスの途上にありつづけるのが現代の知識社会を生きるナレッジ・ワーカー (knowledge worker)[6] ということになる。

「ごくふつうのひとびと (la gente, uomo della strada, ordinary simple people)」が日々の特定の状況のなかで現実に応答し，その応答の連鎖のなかで自らの組成に変化を生じさせていく“創造的プロセス (the creative process, il processo creativo)”を重視した A. メルッチは，下記のように述べている。

> こんにち必要なのは，問題のなかに予め答えが含まれているような問題解決だけではなく，新たな問いを立てることに私たちの創造的な力を向けることであるということが，ますます明らかになってきている。もし創造性と問題解決とを同一視してしまうと，創造的活動は，必ずしも所与の問題に対する解答を導くものではなく，むしろそれは提示された問いのレベルにおけるフィールドを常に再構築することを要求するのだ，という事実を見落としてしまうだろう。……私たちの社会は，創造的プロセスを促す個人の資源を発展させていくという試みに直面している。すなわちそれは，リスクを受け容れ，規定できないものを甘受し，既に知られ，分類され，決定されていたかに見えるものを，一時保留にすることを厭わないような能力である (Melucci 1996=2008: 196)。

「リスクを受け容れ，規定できないものを甘受し」，「フィールドを常に再構築する」道を“引き受け／応答する”とは，遮蔽しようと思えば出来ないことはないと思われることがら，識ることの恐れを抱くことがらをあえて境界を越えて選び取ることであり，「おまえは何をしているのか」と問われ／問いつづけることである。“創る”“始める”は，直線的な生成ではなく，循環し，反射し，“返り／帰り／還り”，“顧みる／省みる”という意味で創造的なプロセスである。

こうして本稿は，新たな問いを立てることを〈いかに“引き受け／応答する

(responding for/to) ” のか〉,〈どのように “［何かを］始める (beginning to) ”（表し出す）のか〉への応答のひとつとしてすすめることとしたい[7)]。

2. グローバリゼーションと「新たな学 (scienza nuova)」

2013 年の報告は，矢澤教授（以下，敬称略とする）がこれまで研究の柱としてきた知識社会学（知識人論，知の生産とかかわる社会理論）と国際社会学についてふりかえり，西欧の社会科学を「翻訳」し非西欧社会に「適応」するという「理論」のグローバリズムに対して，いかに「新たな智 (alternative knowledge)」を生産するのかという文脈で行われた（以下では，報告の骨子を，筆者が理解し得た範囲で整理する）。

（1）**いまの時代は，大航海時代のような知の転換点なのかもしれない。**「グローバル化」によって「外」（「フロンティア」や「荒野」）は消失し，「外のない空間の形成 (delocalization)」が起こっている。また，線形に予測される「未来」が失われ，「未来のない永遠の現在の成立」が起こった。**すべてがローカル，逆立ちしたグローバルなシステムが「共同体」として存在している。「外」のない惑星**となり，逃げていく場所はもはやない，ここから原子力の問題を考えたほうがいい。「世界社会 (world society)」「グローバル社会 (global society)」「惑星社会 (planetary society)」，社会は，グローバリゼーションによって断片化，流動化，ネットワーク化しているということを考慮に入れる必要がある。一つの「地域」（というメタファー）にクリアな境界線を配置することによって成り立ってきた（**19 世紀の理解にもとづく）社会概念は，終焉の危機を迎えている。現に起こっている事例の意味をとらえることができていない。**「国際化」「グローバル化」といった言葉によって，社会の認識を責務とする研究者がとらえようとしてきた現象は何だったのか？ 「国際社会学」には，可視的な外交制度等に着目する国際関係の社会学（「国際・社会学」），海外の具体的な地域を研究する海外の地域研究の社会学（「国際地域研究」）があったが，見ることも想像することも困難な「国際社会」そのものに関する「学」は十分ではなかった。新たな，いままでにない現実をとらえる理論，概念，カテゴリーを必要としている。

(2) そのためには，社会科学，社会学を，存在論・認識論までさかのぼって再検討する必要がある（ウォーラーステイン等），社会科学者は，経験的リアリズム（自らの「知覚」のみがリアルだとする実証主義）か，観念・概念こそがリアルだとする超越論的観念論（カント，ジンメル，アドルノなど）にしばられている。「事象に底在する構造とそのメカニズム」こそがリアルなものと考える超越論的リアリズムは興味深い。想像したり把握したりすることが困難な社会というまとまりを仮定する。**その存在を，そのまま知覚することはできない**が，確証することはできる。社会の構造と個人や集団は，位置や実践を通じて関係づけられる。

(3) グローバル化を可能とした資源としての情報。言葉のちがう人間の間のコミュニケーション。閉じた共同体と共同体の間。セントリズムでないグローバル研究。個々の身体の経験の理論化。概念（新たな名前，言葉，コード）を生産していく。**グローバルなシステムがひとつの共同体となってしまったなかでの「ターミナルとしての個人の質」**の重要性。過去の静態的で閉じられた共同体から動いていく。何かと何かの境界に立ち，グローカルな状況・状態，その特性を明らかにすること。境界に立つグローバル社会運動を研究する必要がある。

この報告での問題提起は，同時代認識，その認識に応答すべき学問，同時代をつくる主体と調査研究者の“在り方 (Ways of being)”のすべてにわたって，根源的な応答を要求するものであった。

カルチュラル・スタディーズ研究者 M. モリス (Meaghan Morris) は，（いま流布している）「理論とは……**グローバルな英語的現象**である。その産みの親は，トランスナショナルな出版社，各地で点々と開催される国際会議，北アメリカ方式の大学院」であり，「職業教育を主眼として運営されているグローバル指向の新しい大学に」おいても，この意味での「理論」が「リンガ・フランカ（共通語）」となっている（**強調は新原**）。しかし，「やがていつの日か，市場原理にどっぷり浸かったその論理に対して，積極的な不満を表明する人も現れるだろう」。だからこそ，「特定の地域の文化の現場について，経験的な問いを発すること（誰が，何を，いつ，どこで，どのように，なぜ）であって，現場検証から一般原則を導き出す作業を避け，拒絶するのに，あえて理論家を気

どる必要もない。私たちに必要なのは，背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析し，自分がおこなったケース・スタディに意味づけをすることである」(Morris 1999=2001: 266-278) と述べた。

それでは，「グローバルな英語的現象」としての「理論」から“ぶれてはみ出し”，「特定の地域の文化の現場について，経験的な問いを発」っし，「背後に横たわる大きなプロセスや縦横のネットワークを分析し，自分がおこなったケース・スタディに意味づけをする」ことを可能とする新たな学（新たな智の地平を，現実のリアルな動きのなかで，対話的に練り上げる scienza nuova）はいかにして可能か？

新たな idea (virtù, philosophy, institution, constitution) は既存の institution の中にその萌芽を持っていなければならない。「新たな智」としての学問とは，特定の状況，とりわけ限界状況 (Grenzsituation) において力を発揮する“臨場・臨床の智 (cumscientia ex klinikós, living knowledge)”であり，支配的なる知とは別の補助線をひき，対立の場の固定化を突き崩し，揺り動かすべきものである。

以下では，矢澤の問題提起に応答するために，「知の転換点」「すべてがローカル，逆立ちしたグローバルなシステム＝共同体」「外のない惑星」という言葉とメルッチの惑星社会論（3節），「事例の意味をとらえることができていない」という指摘と『“境界領域”のフィールドワーク』の限界（4節），「存在論，認識論までさかのぼって再検討」という指摘と「知的様式 (intellectual style)」への着目（5節），「ターミナルとしての個人の質」という提起と“限界状況の想像／創造力 (imagination/creativity of limit-situation)”（6節）という対比によって，考察をすすめていきたい。

3. メルッチの予見的認識としての惑星社会論――「3.11 以降」の惑星社会を生きる

「いまの時代は，大航海時代のような知の転換点なのかもしれない」「すべてがローカル，逆立ちしたグローバルなシステムが共同体として存在している。外のない惑星となり，逃げていく場所はもはやない」という矢澤の問題提起に対して，まず 2000 年 5 月の地域社会学会での A. メルッチの講演「聴くことの社会学」からの言葉が想起される。

今日，じつにしばしば，「世界は深いところで変化してきたし，そしてつねに変化している」という言い方を耳にします。新聞やテレビでの一般的な議論の中で，頻繁にこうした表現に出会うということにはいかなる意味があるのでしょうか。「深いところで変わった」という言い方には，人類史においてほとんどはじめて，これまでの歴史において一度も直面したことがないほどの変化が生じたという意味がこめられています。たしかにこの 50 年ほどの間に，それ以前の 1000 年の歴史において体験してきたであろうような変化と比しても，きわめて根本的なところで，この地球に暮らす人間の諸条件の変化を私たちは産み出してきました。それゆえ，この「深いところで (profondamente)」という言葉はきわめて真剣なものです。そしてまたこれと同時に「世界はつねに変化している」と言われています。これはすなわち，私たちがすでに産み出してしまった変化，いま産み出しつつある変化が「不可逆的なもの (irreversibile)」であるということ，もはやもとの場所に還ることはできないような変化を産み出してきたし，また産み出しつづけているということを意味しています。たしかにこのような意味での変化は人類がはじめて直面した事態です。たとえば，核，遺伝子操作などはまさに好例なのですが，これらはまさに，私たちがすでに獲得してしまった力，そんなものは持っていないのだと自らを偽ったり，そのことを忘れることが決してできないような力の証人として眼前にあります。私たちにできることは，それをどう扱うかについての決断のみです。つまり私たちは，まさにはじめて本当の意味で人類史の岐路に立っています。これは過去の時代において変化がなかったということではなく，近年私たちが産み出しつづけている変化の諸相が，深くそして不可逆的なものであるということによっているのです (Melucci 2000=2001: 2-3)。

メルッチの主著『プレイング・セルフ』の第９章「地球に住む」には，「答えなき問い」「限界と可能性」「生きること，ともに生きること」という小見出しが設けられている。人類は自ら生み出した変化によって，膨大な犠牲と努力によってなんとか応答してきたこれまでの変化とは大きくことなる「深くそして不可逆的な」変化が，連続的かつ多発的に起こり続ける時代を，（もし人類が存続するのだとしたら）生きていかざるを得ない。その意味で，「私たちは，まさにはじめて本当の意味で人類史の岐路に立っています」という，2000 年５

月の時点でメルッチから発せられた“予見的認識”の根源的な意味を「わかってはいなかった！」。そのことを，「3.11」を経た2014年のいま，“自ら学ぶ／骨身にしみて身体でわかる (autoistruirsi)”かたちで思い知らされている。

メルッチは，現代社会への理解を「差異を産出する複合社会」から「惑星社会」へと変化させるという「境界領域への冒険」の途上でこの世を去った[8)]。「グローバル化社会となった惑星」「社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界という，惑星としての地球の二重の関係は，私たちがそこで私的生活を営む“惑星社会 (the planetary society)”を規定している」(Melucci 1996=2008: 3) という言葉は，「惑星社会における人間と意味」という副題が付けられた『プレイング・セルフ』の冒頭に登場している。

「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由 (a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」が現代人に求められる「新しい質」の自由であるとしたメルッチが2001年に夭逝した後，私たちは，「9.11」から継起する「アフガニスタン」「イラク」「世界金融危機」，さらに「3.11」と，“惑星社会の諸問題”の全方位的な展開――持続する危機のなかで，わが身にとって「焦眉の問題 (urgent problem)」の意味と構造を問い直さざるを得ない状況――に直面しつづけている。

「3.11後」ではなく「3.11以降」という言葉の選択には，「突然，想定外の事件が起きたが，それは『おわった』こととなり，また『もとどおり』のありかたへと復興していく」という言説とはことなる方向性がこめられている。「3.11後」はなかなか始まらず，今後の社会の行く末が定まらぬまま，岐路に立ち続けている。しかも，日本社会とそこに生きる私たちの「状況・条件」は，「震災，津波，原発事故」で変わってしまったのではない。“多重／多層／多面の問題”は，「3.11以前」にも“未発の状態 (stato nascente)”で「客観的現実のなかにすでにとっくに存在」し，「3.11」はその問題が顕在化する契機となったに過ぎない[9)]。

メルッチが，もし「3.11以降の惑星社会」に居合わせたとしたら，このようなことをまず私たちに問いかけるのではないか。

> いまもなお，これからもずっと，放射能を含んだ水が流されつづけているこの時代に，なぜ私たちは，自分の身体の問題でもある“惑星社会の諸問題”を意識できないのか？

受難，死，喪失，社会的痛苦を「おわったこと，なかったこと」にする力に取り囲まれ，一般市民同士の，風水土や他の生物との，未来とのはてしなき相克，闘争が予感されるなかで，“見知らぬ明日”に対して，学問／社会学／社会学的探求には，いかなる使命があるのか？

ここには，「汚染水」を“基点／起点 (anchor points, punti d'appoggio)”として，同時代の問題を“惑星社会”における関係性の危機としてとらえ，そのような時代の学問に固有の使命とは何かという問いかけが在る。私たちが直面しているのは，きわめてリフレクシヴ（再帰的／内省的／照射的）な現象であり，資本や市場や情報そのものの運動，あるいは生物多様性や物質循環の運動によって深く拘束されている。それゆえ，“衝突・混交・混成・重合”によって生み出されつづけている現代社会そのものが持つリフレクシビティと，個々人の没思考性，没精神性が対位的に存在しているという「状況・条件」のもとで，個々人がいかなる形でリフレクションをおこない意味を産出するのかというかたちで問題が立てられている。

こうして私たちは，「複雑性のもたらすジレンマ」(Melucci 1996=2008: 173) がもたらす問題――原発・震災問題も含めた“多重／多層／多面の問題 (the multiple problems)”に対する「答えなき問い」を発し続けており，「生活」や「生き方 (Ways of living)」だけでなく，「いのち」さらには“生存の在り方 (Ways of being)”にまで及ぶ価値観の見直しへの責任／応答力 (responsibility) が求められている。

核エネルギーや各種の化合物の「発明」は，私たちの“生存の在り方”を問い，遺伝子操作・産み分け・クローンなどによって「人間」の境界線は揺らいでいる。もはや，「物理的限界」を無視した「対処」法――廃棄物処理場が満杯になったからといって新たな候補地を探したり，化石燃料の蕩尽と CO_2 の排出による「地球温暖化」に対する「原子力発電」，さらにはオイルシェールやメタンハイドレートといった新たな地下資源を採掘したりといったやり方――では，未来への不安を消すことは出来なくなってきた。

統治困難な「除染」や「汚染水」の問題は「3.11 以降の状況」のメタファーでもある。それは，いかなる状況か。

第一に，私たちはいま“見知らぬ明日 (unfathomed future, domani sconosciuto)”に直面している。ものすごい時間をかけてつくられてきた人間

と社会に「深いところでの不可逆的な変化」が連続し，私たちは「変容」さらには「超越」へと向かう［動きのなかの］“不均衡な均衡 (simmetria asimmetrica)”としての「現在」を，“存続”そのものの根本的危機を前提としつつ生きていかざるを得ない。

第二に，私たちは，膨大な時間と無数のひとの努力の集積である山野河海や地域社会が，きわめて短期間に根こそぎにされていくという“底知れぬ喪失／痛みの深淵 (perdita abissale/abisso di dolore)”に直面している。この剥奪は偏差をともなって現象し，それは“社会的痛苦 (patientiae, sufferentiae, doloris ex societas)”であるのにもかかわらず，特定の人間の個人的な“痛み／傷み／悼み”の体験／記憶として深く沈殿していく。その意味では，“底知れぬ喪失／痛みの深淵”と「あいまいな喪失」とのあいだの徹底的な“隔絶 (weiter Ferne, distanza abissale)”が存在している。そして，異なるあり方で“見知らぬ明日”に投げ込まれた個々人のそれぞれが，“生存の在り方”の見直しを迫られている。

第三に，そこから始まる“毛細管現象”“交感／交換／交歓 (scambio, Verkehr)”と“異物の根絶・排除”，“衝突・混交・混成・重合”と“未発の社会運動”[10] といった“多重／多層／多面”の問題群が，“わがこと，わたしのことがら (cause, causa, meine Sache)”とならざるを得ない「状況」があるのにもかかわらず，（研究者も含めた）個々人が，全景を見ることは難しく，想像力の限界にふれるような存在である“惑星社会の諸問題”が発生するメカニズムを把握することは，きわめて困難なものとなっている。

グローバリゼーションによって「外部」（あるいは（「植民」の対象となるはずの）「フロンティア」「荒野」）は消失し，また，線形に予測される未来も失われ，いまや私たちは，思っていたほど広くも無限でもない「惑星地球」に暮らしている。ひとたびこの土地の許容範囲を超えた資源の採掘や汚染が起これば，たやすく社会そのものが「自家中毒」を起こし，“生存”の基盤が脅かされる。こうして“惑星社会”は，すべてがローカルな運命共同体，逃げていく場所のない領域（テリトリー）として存立している。『プレイング・セルフ』というタイトルには，“惑星社会”という現在を生きる人間が，構造とシステムに組み込まれた自己から“ぶれてはみ出し (playing&challenging)”，自らの“かたちを変えつつ動いていく(changing form)”ことへのエールがこめられていた。そして，想像したり把握したりすることが困難な“惑星社会”への洞察

が（倫理にとどまらず）論理的必然となった社会を私たちは生きており，“ 惑星社会の諸問題を引き受け／応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society) ” ことが学問の使命だとメルッチは考えていた。

“ 見知らぬ明日 ” に対して「専門性」をもった知的認識としては「困難だ」「無理だ」という「状況・条件」下で，それでもなお，トータルな人間の学としての（ささやかな）応答を試みるような，学問／社会学／社会学的探求にはいかなる使命があるのか。このような観点から，冒頭の矢澤の問題提起を理解している。

4. 『〝境界領域〟のフィールドワーク』の限界

つぎに，「現に起こっている事例の意味をとらえることができていない」という問題である。筆者は，「新たな，いままでにない現実をとらえる理論，概念，カテゴリー」を構想するため，グローバル・イシューズが衝突・混交・混成・重合するローカルな「場所 (luogo, place)」である “ 境界領域 (cumfinis) ” のフィールドワーク[11] を行ってきた（新原 2011a）。そして，2014 年 3 月に『“ 境界領域 ”のフィールドワーク――惑星社会の諸問題に応答するために』（新原 2014a）という共著を刊行した。

「社会的痛苦の体現者としての病者であり，社会の医者であろうとしつづけた A. メルッチに捧ぐ」という献辞とともに編まれた同書の「縦糸」となっているのは，初期シカゴ学派，P. ブルデュー (Pierre Bourdieu)，A. メルッチ (Alberto Melucci)，A. メルレル (Alberto Merler)，宮本常一，鶴見良行等によってなされた，社会と個人の “ 深層／深淵 ” にまで入り込む質的調査研究の遺産を受け継ぎつつ，これまで 30 年ほどの歳月をかけて練り上げてきた “ 境界領域 ” のフィールドワークの「エピステモロジー／メソドロジー」の限界を診断するという意図であった。

他方で，「横糸」となっているのは，“ 惑星社会 (società planetaria, planetary society) ” という同時代認識とかかわる問題意識であった。すなわち，現代社会は “ 複合・重合 ” 的なひとつのまとまりをもった有機体として形成され，私たちは，「社会的行為のためのグローバルなフィールドとその物理的な限界 (the global field for social action and its physical boundary)」という二重性を持つ “ 惑星社会 ” を生きている。既存の枠組みからはみ出す人々の存在がますます

可視化するグローバリゼーションのもとで，地域社会や個々人が直面する“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する (responding for/to the multiple problems in the planetary society)”ことが，学問が持つべき“責任／応答力”である。そのために，ヨーロッパ，地中海，大西洋，日本，アメリカなどの各地の“端／果て”から，“境界領域”のフィールドワークを行い，“惑星社会”という現在を生きる人間の“生存の在り方 (Ways of being)”と社会の構成のされ方を見直すという企図であった。

メルッチの「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由 (a freedom that urges everyone to take responsibility for change)」「限界を受け容れる自由 (free acceptance of our limits)」を基調とする同書は，刊行時点からすでに，自らの限界をあきらかにすることを同書の眼目としてはいた。

しかしながら，「3.11」は，この「縦糸」と「横糸」を編み合わせていくという「感性的人間的営み (sinnlich menschliche Tätigkeit)」に対して，当初の予想以上に根源的な性格をもっての再審を要求するものだった，本書の終章の第2節「『3.11 以降』の“境界領域”と“惑星社会”」において，古城利明は，これまでの私たちの調査研究が持つ「限界 (our limits)」について，下記のように問いかけた。

> “境界領域”論がこの「物理的な限界」を取り込む「エピステモロジー／メソドロジー」を充分に練り上げていないからではないか，あるいは先送りしているからではないか。だが，すでに触れた「3.11 以降」の状況を踏まえれば，この問題をいつまでも先送りするわけにはいかない。さしあたりそれは，新原のいうように，『“生存の在り方”を問う」なかで，また「人間の境界線」の揺らぎを問うなかで自覚的に取り上げられるべきであろう。だがその「エピステモロジー／メソドロジー」とは何か。ここに残された課題があるように思う。「惑星社会」から「惑星」を展望に入れた「エピステモロジー／メソドロジー」，それは宇宙論を前提とした身心論なのか，空無を覗き込んだ現象学なのか，課題は深い（古城 2014: 442-443）。

この古城の問いかけと共振するかたちで，筆者は，序章の「おわりに」で，メルッチの「限界を受け容れる自由 (free acceptance of our limits)」にふれ，第8章の「おわりに」では，『“惑星社会”と人間の『物理的な限界』から始める」

という到達点を示した。これは,“ 境界領域 ”のフィールドワークが,〈「物理的な限界」「有限性」の問題を，もっとも根源的な課題として受けとめ (accept) たうえで学問を始める〉ことをなし得ていなかったことの証左でもある。

それゆえ,『“ 境界領域 ”のフィールドワーク』以降の課題は，すでに“ 出会って ”いた“ 惑星社会の諸問題 ”に真っ正面から取り組み，とりわけ「3.11 以降」の『“ 惑星社会 ”と人間の『物理的な限界』から始める」ことである。つまりは，定型化した「問題解決」によって向き合うべき根源的な課題をやり過ごし「先送り」していくという思考態度 (mind-set) から“ ぶれてはみ出す ”こと。手元に蓄積された“ 知慧 (sapienza) ”や“ 智恵 (saperi) ”を全否定するわけではないが，これまでの「知」の枠組みや組成を一度は手放すことを恐れないこと。ひとまず学びほぐす (unlearning) ことへの勇気を持って,「のみの市」のように“ 衝突・混交・混成・重合 ”した，手元にあるばらばらの諸要素でのブリコラージュ (bricorage) を試みること。「人文的な素人 (humanistic amateur)」として,“ 素人の学 (cumscientia di amatori) ”を「普請」し直すことが,「3.11 以降」の焦眉の根源的な,「深い」課題となった。

5. 「知的様式」への着目

しかしこの根源的な課題へと歩みをすすめるためには,「存在論，認識論までさかのぼって再検討」，すなわち，くりかえし非意識的に構築してしまう「問題解決」を生み出す「知的様式 (intellectual style)」を自覚する必要がある。この点に関して，平和研究者 J. ガルトゥング (Johan Galtung) は，Sinking with Style（「優雅に品よく没落を」）(Galtung 1984=1985) という論考のなかで，以下のような問題提起をおこなっている。ガルトゥング本人が日本語版のために 7 本の論考を選んだ著作である矢澤・大重訳の『グローバル化と知的様式』(Galtung 2003=2004) がもつ「実践志向性」と「根底的批判性」の“ 基点／起点 (anchor points, punti d’appoggio) ”となっているものだと考えられる。

> 市場での競争力を確保するための高い生産性を追求した場合，そこにはおよそ以下のようなコストが存在している。
> 第一に，官僚・経営者・研究者というテクノクラート（資本あるいは「問題」の管理者,「問題」を処理して解決方法を見つける専門家）の複合体

が管理する社会となること。既得権益を占有する階層を中心にこの体制を維持するために必要とされる人間は，高生産性が必要なことは理解するが，「国際政治，歴史，文化，自然，人間」についての理解を欠くことが「出世の条件」となること。

第二に，少数の官僚・経営者・研究者によって管理・保護されるそれ以外の人間には，「強制的自由時間，非自発的余暇，無意味な労働」がもたらされ，能力の実現と人とのつながりが奪われること。

第三に，システムの「周縁部 (margin)」でなく中心部における「ストレス」と「汚染」（身体が受け付けない化合物）がもたらされることによって，精神障害，心臓疾患，悪性腫瘍といった「文明病」に直面すること。

そして，これらのコストをもたらす「必然的に没落へと至る内なるプログラム (an inner programme that should be implemented)」の背後には，①中心と辺境という空間概念，②進歩や成長の概念（時間概念），③知識の概念化（複雑な問題を操作可能な単位にまで「X−Y 関係」に還元し，演繹関係に基づく知的ピラミッド造り），④人間と自然との関係における人間中心主義，⑤白人・男性の優越，垂直的統治，⑥普遍的かつ排他的な存在，唯一の中心といったコスモロジーが存在している。すなわち，「成長の観念」「知識体系化の方法」「自然との関係を組み立てていくやり方」(the idea of growth, the way we organize our knowledge, the way we organize our relation to Nature) や「他の民族，他の性，他の年齢集団との関係を組み立てていくやり方」(the way we organize relations to other peoples, to the other sex, to other age-groups) と，西欧的宗教への信条との間には，「内的一貫性 (an inner consistency)」が存在しているのだとする (Galtung 1984=1985: 3-28)。

ガルトゥングの問題提起は，「すべてがローカル，逆立ちしたグローバルなシステムが共同として存在している」のに「そのまま知覚することはできない」という矢澤の指摘，そして「それは宇宙論を前提とした身心論なのか，空無を覗き込んだ現象学なのか」という古城の提起とも重なり，きわめて根源的なものである。すなわち，すべてが内部であるような，逃げ出す場所などない世界をとらえることの困難さ，グローバル社会の社会学の身体化の困難さは，物質文明を生み出す「プログラム」そのものによっても拘束されているという

ものである。

プログラムを生み出すプログラムを創出した人間は，社会というシステムを“発明”し，生物としての自らの閉じた定常系のシステムを破壊する／革新するというアンビヴァレンス (ambivalence) を抱えてきた。生物として系統発生／個体発生のなかにある人間は「例外」や「変異」によって進化するが，拡大された身体としての国家社会は機械化（官僚制化）していき，システム化された社会は，大量で高エントロピーの“造り出された廃棄物 (invented refuse)”で満たされる。「統治性の限界 (the Limits of Governmentality)」への“選択的盲目”によって，「統治不能なもの (the ‘ungovernable’)」の側にその原因を求め“異物 (corpi estranei)”の根絶・排除へと向かう。個々の人間同士の“交感／交換／交歓 (scambio, Verkehr)”“共感・共苦・共歓 (compassione)”は可能であるとしても，ここには“多重／多層／多面”の“隔絶 (weiter Ferne, distanza abissale)”が存在している。

①46 億年の惑星地球の活動の「果実」である石炭や石油などの，使い切ったら二度ともとにはもどらないし作り出せない「地下資源」が生み出されるまでの膨大な時間と，消費される時間の短さとの“隔絶”。②そしてまた，「安価」で「便利」な「発明品」であるプラスチックの実質的コストを計量しなかった知のシステムと惑星地球との間の“隔絶”でもある。③あるいはまた，膨大な時間とエネルギーを費やし蓄えられてきた人間や他の生物のいのちをつなぐ“智恵 (saperi)”から“隔絶”し，「選択のジレンマ」のもと，それでも何らかの“線引き (invention of boundary)”をしていかざるを得ない。④すでに造り出してしまった「可能性のフィールド」は，私たちに 10 万年後という“隔絶”を含みこんだ“責任／応答力”を求めてくる。⑤“廃棄物の発明”“造り出された廃棄物”は，〈都市と地域の関係性〉〈ひととひとの関係性〉，〈惑星地球と社会システムとの関係性〉〈社会システムと個々人の身体との関係性〉の“隔絶”を複雑に絡み合わせつつ，個々人の身体のレヴェルで現象し，“廃棄物の反逆”をもたらす[12)]。

私たちの「日常」は，社会的大事件のみならず個人の病，死も含めて，「未発の事件」によって満たされている。「未発の事件」は，実は既にそれに先立つ客観的現実の中に存在していたのであって，ただ私たちが，眼前の出来事に対して“選択的盲目”を通していたにすぎない。「日常生活」を生きるものにとっては，「想定外の」災害や事故，「予期せぬ」病気など，いわば「見知らぬ

明日」は，閉じていた目をこじ開けるようにして「まったく突然に」やって来る。このとき私たちは，たった一人で“異郷／異教／異境”の地に降り立つような感覚を持たざるを得ない。それはいわば，“見知らぬ明日 (unfathomed future, domani sconosciuto)”との直面である。突然すべてがストップし，景色もにおいも変わり，味覚も違う。道を行き交う人たちの談笑に妙ないらだちを感じ，ただオロオロする。それでもなお，人間に“埋め込まれ／植え込まれ／刻み込まれ／深く根をおろした”ものであるはずの“智”が，輝きを放つ瞬間があるとしたらそれは，いかなる条件のもとで，いかなる旅程をともなって現象するのか。

6. むすび――〝限界状況の想像／創造力 (imagination/creativity of limit-situation)〞

「転換期」であるのにもかかわらず／あるがゆえに，「その存在を，そのまま知覚することはできない」社会というグローバルなフィールドの「プレーヤー」は，いかにして，「グローバルなシステム＝共同体のなかの『ターミナルとしての個人の質』」を創成していくのか。この問題を考えるとき，自らが「社会的痛苦の体現者としての病者」であることと分かちがたく結びつくかたちで「社会の医者」であろうとしつづけた A. メルッチの「晩期」を常に想起させられる。メルッチは，ガルトゥングの「精神障害，心臓疾患，悪性腫瘍といった『文明病』と重なる指摘を，“生体的関係的カタストロフ (la catastrofe biologica e relazionale della specie umana)”という言葉で遺している[13)]。

メルッチは，この“生体的関係的カタストロフ”という認識に根ざした“生存の在り方”の見直しに着手する途上で亡くなった。象徴的だったのは，彼自身が「病んだ近代」の「劇的な収支決算」とした白血病が，最初は，当人にはなんの“兆し・兆候 (segni, signs)”も，ちょっとした不具合 (piccoli mali, minor ailments) も，“知覚”させない病だったことである。しかしひとたび顕在化すれば，身体の内から湧き出る声によってではなく，医療機器から「排出」されるデータによってのみ，その姿をあらわす。そしてなにひとつ，度重なる移植で四，五ヶ月は小康状態がつづいたが，『処方』らしい『処方』は存在しなかった。「社会と個々人の“根”を揺り動かすものとして社会運動は，個々人の内奥の声を聴くことから始められるしかないのだと，微細で猥雑な個々の場面

のかすかな“兆し・兆候”に耳をすまし，書き，語り，生きた智者，この社会の未発の病を見通し続けた智者にとって，これほどの予測不可能性と“知覚”の限界，人間存在としての「限界状況」がつきつけられることはなかった。

「限界状況 (Grenzsituation)」は，ナチスの時代を生きたドイツの哲学者カール・ヤスパースの言葉である。死，病，痛苦，紛争，罪責，偶然など，膨大な時間とエネルギーを費やして人類がつくりあげてきた日常を粉砕してしまうような「状況」から，私たちは逃れることは出来ない。実はずっと，すでにそこに在り続けていた“限界状況 (Grenzsituation, situazioni-limite, limit-situation)”を，“忘却する性向 (amnesia)”によって，瓦礫の 20 世紀と 21 世紀を私たちは生きてきた。ヤスパースはまた，「いかなることも忘れずに (Kein vergessen)」と言った。この言葉の意味を，いまあらためて，“すべてのことを忘れずに (memento momenti)”“追想／追憶しつづける (keep re-membering, ri-cordando)”しかない。記憶のつなぐための「か細い糸」は，“居合わせる (Being there by accident at the nascent moments in which critical events take place)”ことで紡がれる。

“限界状況の想像／創造力”は，「限界状況」が“生体的関係的カタストロフ (Biotic and relational catastrophe of human species)”として立ち現れる社会の“想像／創造力 (immaginazione/creatività, imagination/creativity)”である。現在の「知」が行使する分解 (Scheidung) の力は，大波のごとくに“心身／身心”を打ち砕き，切り刻み，標本化する．しかし，その生命力が最後の一滴まで奪われ尽くそうとする“喪失”の瞬間にこそ，かえってその内側から，予想以上の反発力が沸き上がってくる．そしてこの“責任／応答力 (responsibility)”に後押しされて，大波にのり，航海しつづける道を選択する．ここに，“生体的関係的カタストロフ”のもとでの“責任／応答力”，すなわち，“生体的関係的想像／創造力 (immaginativa/creatività biologica e relazionale della specie umana)”への「展望」を見出すことが出来る．

Sinking with Style における根源的な問題提起に比して，ガルトゥングが提示する方策は，「皆がもっと手仕事をする (more manual work all of us)／物質的豊かさの限界を自覚する／予測困難なパターンの未来 (a less predictable pattern for the future)／決まり切ったライフ・サイクルからはずれた生活を営む可能性 (more possibility of organizing life with a less tidy life-cycle)／自家消費のための生産，物々交換のための生産，生活必需品を選るのに最低限必要な貨幣に交換

するための生産」を試みるといったささいなものである。

しかし私たちは，アスリートのように，食事・睡眠・トレーニング・ストレスコントロール・家事・育児・仕事などをセルフ・プロデュース／ガバナンス／マネジメント／オペレートし，自分／組織・集団／コミュニティ・地域／社会の“多重／多層／多面”のそれぞれの場において「場」を創ろうとしていくしかない。

「外部」の「権威」を求め，「外挿」による「肥大化」を回避しつつ，真に学び，すでに身体化している知識や智恵を丁寧に組み替えていくという“創造的プロセス (the creative process, il processo creativo)”を自ら／ともに“始める (beginning to)”こと。この“願望と企図”を促す試み (=iniziative culturali) の下支えをすること。“寄せ集めるという骨折り”“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立つ”ことと，“対話的にふりかえり交わる”ことを対位的に行いつづけること。

この異質なものたちのコミュニティ／枠組みそのものを考える場の集団的な“共創・共成”／学問の世界の「結」（協働，協業）が，矢澤の問題提起を“引き受け／応答し，始める”ことだと考えている。

注

1） インタビューは，2006年1月9日，立川パレスホテルにて，新原道信，奥山眞知，中村寛，山田（中里）佳苗，鈴木鉄忠を聴き手として行われ，10時間以上に及ぶ話を，下記の構成にてとりまとめたものである。

1. 育つ elaborate：知と消費文化にふれる――銀座の裏通りで／なぜ社会学だったのか――信濃の戦後民主主義教育から／時代の影響とともに――東京大学で／ごくふつうの知識人・論／地域社会の現実へのふれかた
2. 出会う encounter：セントルイスでのメディエーター (mediator) との出会い／国際社会学会でのカステルとメルッチとの出会い
3. かかわる commit：制度づくりにかかわる／地球社会研究専攻の創設／制度としての社会学をつくる／国家によってコントロールされない学問づくり／なにかが立ち上がる瞬間の社会の学
4. 変わっていく　metamorphoses：社会学のメタモルフォーゼ／メタモルフォーゼの基盤
5. 願望し企図すること power of idea：研究者のネットワークづくりと都市空間の知識化／社会学を身体化する／自分の弱点と向き合って

2）「新たな学 (scienza nuova)」を構想した哲学者 G. ヴィーコが生きたバロック時代のヨーロッパの音楽は，低音部の音の進行を司る「通奏低音 (Basso continuo」とそれぞれの旋律が多声をつらねるかたちで音楽を形成していく「対位法」が基本であった。ヴィーコの同時代人であり，「通奏低音」と「対位法」を重視したバロック後期の音楽家である J. S. バッハ

(Johann Sebastian Bach) は，楽曲の構造のみならず，楽器や演奏する建築物の構造までもよく理解していた。

3） 前述のインタビューは，「身体化された社会学のために」というタイトルで行われ，「社会学を身体化する」の項目では，「社会学がどのように血肉化されていくか，それがどのように社会に生かされてゆくのか」（矢澤 2006: 414-417）について語られている。

4） E. サイード (Edward Said) もまた，その著書『始まりの現象』のなかで，『新たな学 (Principi di scienza nuova d'intorno alla natura delle nazioni)』（初版 1725 年，二版 1730 年，三版 1744 年）の著者 G. ヴィーコ (Giambattista Vico) と「対話」しつつ，「始まり (beginnings)」とは何か，それはいかなる「活動 (activity)」「瞬間 (moment)」「場所 (place)」「心構え (frame of mind)」を持つものかについて考察している（Said 1975=1992: xiv ページ）。

“作る／造る／創る”“始める”は，他者の声を“聴く”こと（ここには既にこの世界にいなかったり，この場にいなかったり，まだ生まれ来たることのないといったことから非在の他者の声を“聴く”ことも含まれる），かろうじて受けとめた声の痕跡から染み出るその生命を，生きられたものとするためのみに／そのためにのみ“声を発する”こと。この営みをともにする同伴者と旅をし，対比し，“返り／帰り／還り”“顧みる／省みる”こと，“つたえる”こととのつらなり，“識ることへの動き”の中にある。

5） 前述のインタビューでは，社会学者は，「エンピリカルでトリビアルな調査を繰り返してゆく」「一人一人が調査票をもって，町に出てゆく」「そして，色んなものを聞いて帰ってくる」「みずから労働する知識人」であり，「集団的な研究，集団的なリサーチ，集団的なインテリジェンス」を旨とするという文脈で語られている（矢澤 2006: 385-386）

6） cf.（野中・紺野 2003: 8-19）。『失敗の本質――日本軍の組織論的研究』（野中他 1991 [c1984]）において，状況認識能力の欠如に関する過去と今日の相似形について研究した経営学者の野中郁次郎は，現象の本質を洞察し概念化する力（コンセプト創造力）を持った「ナレッジ・ワーカー」を構想している。「ナレッジ・ワーカー」は，知識化した社会において，社会的資源となる「知」を操作することに秀でているが，必ずしも知的創造の方法を創出する行為にはかかわりをもたない層（5 節で紹介する J. ガルトゥングの指摘にある「国際政治，歴史，文化，自然，人間」についての理解を欠くことが「出世の条件」となる人間像と重なる）ではない。特定の個人であると同時に他者との間でネットワーク化していき，「創造・総合の知」「仮説創造」「構想力」によって，組織・集団に“化学反応／生体反応 (reazione chimica/vitale)”を起こしていく。経営学，哲学，社会学は，［変化しつづける］“偏ったトタリティ (totalità parziale)”を志向し，総合への実践により，実際的に可能なかたちでの総合をやりくりする（実践的総合）する技法 (art) でもあるという点でも共通性がある。言い方を変えるならば，形而下の学問（現象の学），“臨場・臨床の智 (living knowledge)”である。

7） このような理解から，『地球情報社会と社会運動』「あとがき」では，「各自の職場や地域で，社会の根底とかかわる形で，いまどのように〈社会学を身体化して生きているか〉を問い直すプロジェクト……どのように自らの“智”を構想し，実践しているのか／いないのかが問われることであり，自らの至らなさを顕わにして，いわば「敗北」「挫折」「恥」の記録として，いま何を理解していないのか，いま何を生きられていないのかを示すことによって，かろうじて知の世界における消費や喧噪の生産に加担しない (nicht mitmachen) 道へと少しでもむかう」（新原 2006: 426）と述べた。

8） メルッチの社会理論については，（新原 2004; 2007; 2009; 2010; 2011b）などを参照されたい。

9） ここでの叙述は（新原 2014a: 2-6）と重なる。「3.11 以降」の状況についての同様の考察

は,（新原 2013a; 2014a; 2014b; 2014c）などで，多声的・対位的に試み，積み重ねてきている。

10）“毛細管現象／胎動／交感／個々人の内なる社会変動／未発の社会運動 (movimenti nascenti)”については，(2003; 2013a; 2014a) を参照されたい。

11）“境界領域”のフィールドワークは，サルデーニャ（イタリア），沖縄，周防大島，コルシカ（フランス），リスボン・アゾレス（ポルトガル），カーボベルデ，ヘルシンキ・ミッケリ（フィンランド），オーランド（フィンランド・スウェーデンの間国境地域），ヴァッレ・ダオスタ（イタリア・フランス・スイスの間国境地域），トレンティーノ＝アルト・アディジェとアルプス山間地（イタリア・オーストリア・スイスの間国境地域），フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリアとゴリツィア／ノヴァ・ゴリツァ（イタリア・オーストリア・スロヴェニアの間国境地域），トリエステからイストリア（イタリア・スロヴェニア・クロアチアの間国境地域），ニューヨーク（ハーレム）などの各地でおこなってきた。そのなかで，いくつもの“多重／多層／多面”の「境界 (finis)」が“衝突・混交・混成・重合”しつつある (cum)「場所」「時期」「瞬間」あるいは「成層」としての“境界領域 (cumfinis)”を，①“テリトリーの境界領域 (frontier territories, liminal territories, terra ’di confine’)”，②“心身／身心現象の境界領域 (liminality, betwixst and between)”，③“メタモルフォーゼの境界領域 (metamorfosi nascente)”という三つの位相(fase)に分節化するに至り，“衝突・混交・混成・重合”によって練り上げつつある現代社会の「状況」とそこに生きる人間の「条件」についての“対話的なエラボレイション (coelaborazione, elaborazione dialogante)”を行った。

12） ガルトゥングの問題提起と「プログラムを生み出すプログラム」については，すでに（新原 2013b: 8-9; 2014b: 51-52）で論じていることと重なる。

13）“生体的関係的カタストロフ (la catastrofe biologica e relazionale della specie umana, Biotic and relational catastrophe of human species)”については，（新原 2010; 2013a; 2014b; 2014c）などで論じている。

引用・参考文献

古城利明，2014「再び“境界領域”のフィールドワークから“惑星社会の諸問題”へ」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク――惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部。

Galtung, Johan, 1984, “Sinking with Style”, Satish Kumar(edited with an Introduction), *The Schumacher lectures. Vol. 2*, London: Blond & Briggs.（=1985，耕人舎グループ訳「シュマッハーの学校――永続する文明の条件』ダイヤモンド社）

――――，2003, *Globalization and intellectual style : seven essays on social science methodology*, 2003（=2004，矢澤修次郎・大重光太郎訳『グローバル化と知的様式――社会科学方法論についての七つのエッセー』東信堂）

Hegel, Georg Wilhelm Friedrich, 1986 [c1970], *Phänomenologie des Geistes: Werke in 20 Bänden mit Registerband: Bd. 3*, Frankfurt am Main: Suhrkamp.

Melucci, Alberto, 1996, *The Playing Self: Person and Meaning in the Planetary Society*, New York: Cambridge University Press.（=2008，新原道信他訳『プレイング・セルフ――惑星社会における人間と意味』ハーベスト社）

――――，2000, “Sociology of Listening, Listening to Sociology”.（=2001，新原道信訳「聴くことの社会学」地域社会学会編『市民と地域――自己決定・協働，その主体　地域社会学会年報 13』ハーベスト社）

Morris, Meaghan, 1999, “Globalisation and its Discontents”.（=2001，大久保桂子訳「グローバリゼーションとその不満」『世界』2001 年 4 月号）

新原道信，2003「自らを見直す市民の運動」矢澤修次郎編『講座社会学 15　社会運動』東京大学出版会。

ーーーー，2004「生という不治の病を生きるひと・聴くことの社会学・未発の社会運動ーーA・メルッチの未発の社会理論」東北社会学研究会『社会学研究』第 76 号。

ーーーー，2006「序」「現在を生きる知識人と未発の社会運動ーー県営団地の“総代”“世間師”そして“移動民”をめぐって」「あとがき」新原道信・奥山眞知・伊藤守編『地球情報社会と社会運動ーー同時代のリフレクシブ・ソシオロジー』ハーベスト社。

ーーーー，2007『境界領域への旅ーー岬からの社会学的探求』大月書店。

ーーーー，2009「変化に対する責任と応答を自ら引き受ける自由をめぐってーー古城利明と A. メルッチの問題提起に即して」『法学新報』第 115 巻，第 9・10 号。

ーーーー，2010「A. メルッチの“境界領域の社会学”ーー2000 年 5 月日本での講演と 2008 年 10 月ミラノでの追悼シンポジウムより」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 20 号（通巻 233 号）。

ーーーー，2011a『旅をして，出会い，ともに考える』中央大学出版部。

ーーーー，2011b「A. メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパーー『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 21 号（通巻 238 号）。

ーーーー，2013a『“惑星社会の諸問題”に応答するための“探究／探求型社会調査”ーー『3.11 以降』の持続可能な社会の構築に向けて」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 23 号（通巻 248 号）。

ーーーー，2013b『“境界領域”のフィールドワーク（3）ーー生存の場としての地域社会にむけて」『中央大学社会科学研究所年報』17 号。

ーーーー，2014a『“境界領域”のフィールドワークーー惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部。

ーーーー，2014b「A. メルッチの『限界を受け容れる自由』とともにーー3.11 以降の惑星社会の諸問題への社会学的探求（1）」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学 24 号（通巻 253 号）。

ーーーー，2014c「A. メルッチの『創造力と驚嘆する力』をめぐってーー3.11 以降の惑星社会の諸問題に応答するために（1）」『中央大学社会科学研究所年報』18 号。

野中郁次郎他，1991『失敗の本質ーー日本軍の組織論的研究』中公文庫。

野中郁次郎・紺野登，2003『知識創造の方法論ーーナレッジワーカーの作法』東洋経済新報社。

Said, Edward W., *Beginnings : intention and method,* New York: Basic Books, 1975.（＝山形和美・小林昌夫訳『始まりの現象ーー意図と方法』法政大学出版局，1992 年）

矢澤修次郎，2006「身体化された社会学のためにーー大学と都市空間の知識化にむけて」新原道信・奥山眞知・伊藤守編『地球情報社会と社会運動　同時代のリフレクシブ・ソシオロジー』ハーベスト社。